北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川

令和４年度パラスポチャレンジ報告書

１　事業の概要

■ねらい

障害者の生涯学習推進に向け、アダプテッド・スポーツを研究する大学と連携し、小・中学生に障害の有無にかかわらず共にスポーツに取り組む楽しさを体験させることを通じて、障害の有無にかかわらない社会参加や活躍の場づくりの機会とするとともに、障害者の学びを支援する人材育成の基盤とする。

■期日　R４.12.３(土)～４日(日)　１泊２日

■対象　小学生・中学生（障がいのある人もない人も）

■場所　北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川

■参加者数　25 名（内　障がい者７名）

■ボランティアリーダー　10 名

アンプティサッカー

２　プログラムの概要

■日程表

	13:30 14:00　14:30　17:00　17:30　18:30　21:30　22:00									
12/3（土）～４（日）	受付開始時間：１3:30	受付	出会いのつどい	活動１ パラリンピック競技、アダプテッドスポーツ等の体験		夕食	自由参加活動（焚火、カード・ボードゲーム等）入浴	就寝準備	就寝	
	6:30　7:30 8:30　9:00　11:00　11:20　12:00									
	起床	準備	朝食	部屋清掃 部屋点検	活動２ チームで対戦（何になるかはお楽しみ）	ふりかえり	別れのつどい	解散		

■活動１　パラリンピック競技、アダプテッド・スポーツ等の体験

①　車いす競技	陸上競技用、ラグビー用、バスケットボール用の車いすの乗車体験。
②　アンプティサッカー	杖を突いた状態でのサッカーでのドリブルやシュートの体験。
③　フライングディスク	椅子に座った状態でフライングディスクを投げ、的に当てる体験。
④　カーリング	椅子に座った状態で的に止まるようにステッキでストーンを押す体験。
⑤　ボッチャ	ジャックボール（目標球）に赤青のボールを近くに止まるように投げる体験。
⑥　ゴールボール	アイマスクをして目が見えない状態で、転がってくる鈴の音がするボールを止める体験。
⑦　ブラインドサッカー	アイマスクをして目が見えない状態で、鈴の音がするボールを音を頼りにドリブルする体験。
⑧　シッティングバレーボール	グループで輪になり床に座った状態で、ミニバレーボール用のボールを床に落とさずに連続トスをする体験。

車いす競技

カーリング

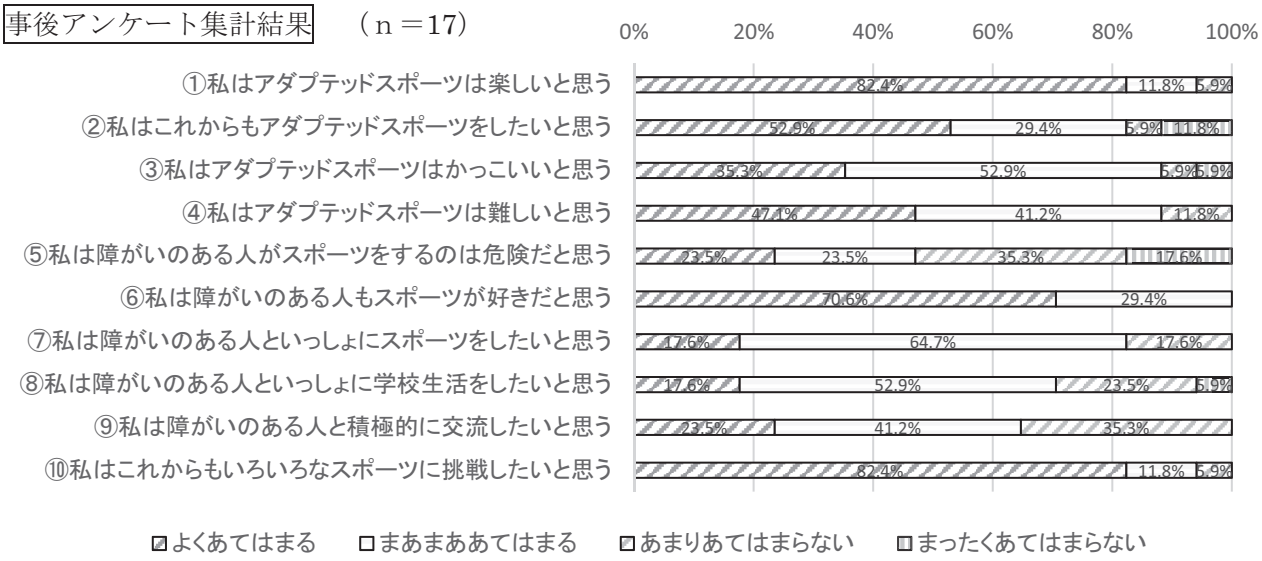
■活動２　チームで対戦

○ボッチャの総当たり戦

ボランティアスタッフも加わり、任意の８チームでのリーグ戦。イニングごとに最低１回は椅子に座ったままでの投球をするルール。コートは進行方法を理解しセルフジャッジで行う。

3　事業後のアンケート、感想等

事後アンケート集計結果　（n＝17）



全体の感想

- チームの人と一緒に達成感を味わえた。もっと他のアダプテッド・スポーツもしたいと思った。
- アダプテッド・スポーツは難しいこともあり大変だったけれども、チームの人と一緒にプレイすることが楽しかった。
- 知らない人ばかりだったけれども一緒にスポーツをしてなかよくなれて良かった。
- 障がいがあってもスポーツが好きで、スポーツを楽しむことができることはできることは良いことだと思う。
- 思っていたよりもアダプテッド・スポーツが楽しかった。パラリンピック選手はすごいと思う。

ゴールボール

4　まとめ

参加者がアダプテッドスポーツに触れ、そのスポーツそのものの楽しさや障がいの有無にかかわらずに楽しめるスポーツであることの理解を深められたことは本事業の大きな成果であり、本事業の実施課程で大学と連携し、大学のもつ資源を活用させていただくことで事業内容が充実したことは今後同様の事業を進める際の大きな強みとなる。

しかし、「障がいの有無にかかわらない」をうたった事業としては、ほとんど健常者しか参加がなかった事業となったことは、大きな課題である。

障がいのある児童・生徒にも参加しやすいような参加形態（部分参加を可能にした）、通常の主催事業よりも大々的な広報（空知管内対象学年の全児童へのチラシ配布、近隣の放課後デイサービス事業所への訪問）等の参加に結び付くであろう工夫を行ってみたが、結果は伴わなかった。

要因としては、新型コロナ感染症の再拡大と重なってしまったこと、保護者の送迎の負担などが考えられる。また、障がい当事者やその保護者にネイパル砂川が行う「障がいの有無に関わらず参加できる事業」の認知度が低かったことも考えられる。

ボッチャ

ネイパルは合理的配慮のもと、障がいの有無にかかわらず参加者を受け入れる施設ではあるが、障がい当事者やその保護者からは事業に参加するハードルが高い可能性もある。

障がい者の生涯学習を支えるためには、このような事業を定期的に開催し、障がい当事者やその保護者の認知度を向上させることが大切である。

令和４年度（2022 年度）「障害者の生涯学習推進コンソーシアム形成事業」
障がいのある方を対象とした体験活動支援施設における事業の実証研究

１　調査の目的

障がい者の生涯学習を推進していく上で、学びを身近で支える教育行政の果たす役割は重要とされている。本研究は、障がいの有無に関わらず、全ての人が体験できる青少年教育施設における活動の実践や参加者への調査を通じて、今後の障がいのある方を対象としたプログラム実施に向けた実証研究を行う。

２　プログラムの概要

（１）目的

障がいの有無に関わらず、全ての人が体験できる青少年教育施設における活動の実践や参加者への調査を通じて、今後の障がいのある方を対象としたプログラム実施に向けた実証研究を行う。

（２）実施日

①令和５年（2023 年）２月 11 日（土）～12 日（日）１泊２日

②令和５年（2023 年）２月 13 日（月）

（３）活動場所

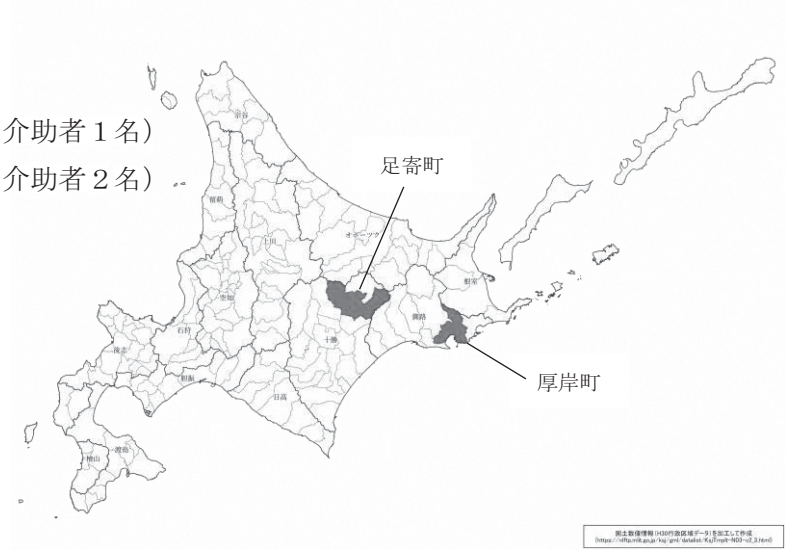
①北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄（十勝管内足寄町）

②北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸（釧路管内厚岸町）

（４）参加実績

①足寄：５名（障がいのある方４名、介助者１名）

②厚岸：５名（障がいのある方３名、介助者２名）



（５）運営者

①足寄：10 名（北海道立生涯学習推進センター職員３名、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄職員２名、北海道教育庁十勝教育局職員１名、サウナ普及団体３名、看護師１名）

②厚岸：10 名（北海道立生涯学習推進センター職員１名、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸職員５名、北海道教育庁社会教育課職員１名、サウナ普及団体２名、看護師１名）

（６）プログラムデザイン

①足寄

１日目

	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30	16:00	17:30	19:00	20:00	21:00	22:00
	開会式	ブレイクアイス	テーションオリエン	入室 活動 準備	**サウナ講義**	**テントサウナ体験** （屋外特設設備）	入浴	夕食	**軽スポーツ ボッチャ 体験**	就寝 準備	就寝

２日目

6:30	7:30	8:30	9:00	11:00	11:30	12:30
起床・ 布団消毒	朝食	部屋 清掃	**コーヒー教室**	ふりかえり	昼食	閉会式

・体験活動①「サウナ講義・体験」：サウナについての学び（注意事項とサウナによる効果）と屋外テントサウナを体験する講座型体験活動
・体験活動②「ボッチャ」：ボッチャ体験を通して参加者同士の交流を図る軽スポーツ活動
・体験活動③「コーヒー教室」：リラックス効果のあるコーヒーの学び（コーヒーについて）とハンドドリップ実践の講座型体験活動。

②厚岸

15:30	15:45	16:30	16:35	16:50	17:30	18:30	19:00	19:30
開会式	**軽い運動体験**	活動準備	**サウナ講義**	**テントサウナ体験** （屋外特設設備）	入浴	夕食	ふりかえり	閉会式

・体験活動①「軽い運動体験」：最新のフィットネスマシン等を活用し、「体を動かす心地よさ」を体感する軽い運動体験
・体験活動②「サウナ講義・体験」：サウナについての学び（注意事項とサウナによる効果）と屋外テントサウナを体験する講座型体験活動

（７）実施の準備・運営と指導

プログラムを運営・指導するにあたって、次の事項に留意した。

・コロナ感染症対策：参加者のマスク着用、検温、手指消毒を徹底するとともに、活動の際はソーシャルディスタンスを保つなど感染症対策を講じた。
・ヒートショック対策：事前に参加者の健康チェックを行うとともに、活動前には入浴して体を温めてからサウナを利用するようにした。また、看護師を配置するなど安全面の確保に向けて配慮した。
・障がい種の把握：参加者を対象に事前調査を実施し、障がい種や体験活動の経験の有無など、参加者一人一人の特性を把握し、施設の利用やプログラムの運営の際に必要な支援について配慮した。
・事前踏査：運営者とサウナ業者が活動場所を事前に踏査し、安全に活動できるような環境を整備した。また、運営者がオンラインを活用して事前に綿密な打合せを行って当日に臨んだ。

３　調査の概要

（１）調査の概要

「インクルーシブキャンプ In ほっかいどう」実証研究（青少年教育施設における事業の実証）

・社会教育施設における障がい者への支援体制・状況

・社会教育施設における体験活動プログラムの実証

・ヒアリング終了後、調査報告書としてまとめる。

（２）調査時期

①事前調査

事業実施約３週間前に、参加者（障がい当事者）を対象に質問紙調査を実施。調査用紙をメールで送付し回答を得る。項目は、参加者に関する基本情報。

②事後調査

プログラム終了後、ふりかえりの時間に参加者及び介助者を対象に質問紙を配付し、回答を得る。また、必要に応じてヒアリングを行う。

（３）調査対象

・29 歳男性（帯広市在住）：身体障がい（肢体不自由・独歩）

・29 歳男性（中札内村在住）：身体障がい（肢体不自由・独歩）

・48 歳男性（帯広市在住）：身体障がい（肢体不自由・車いす使用）

・56 歳男性（岩見沢市施設）：身体障がい（脳性麻痺・車いす使用）

・47 歳男性（厚岸町施設）：知的障がい

・19 歳男性（厚岸町施設）：発達障がい

・19 歳男性（厚岸町施設）：精神障がい、発達障がい

（４）調査員（研究員）

北海道立生涯学習推進センター職員

（５）調査内容

①事前調査

質問項目

・障がい種及び診断された時期

・特別支援学校通学経験

・体験してみたい自然体験活動や体験ツアーの内容

・普段利用している社会教育施設やこれまで訪問した景勝地、北海道遺産等のスポット

・これまで利用した施設等について、障がい当事者として困ったことやこうしてほしいという要望

・普段実施している体験活動の種類や内容

②事後調査

・障がい当事者の視点から見たプログラム内容についての満足度、感想、課題点など

・青少年体験活動支援施設を利用した感想、課題点など

取組３

学校教育法第 105 条に基づく履修証明書の発行に向けた新たな学習プログラムの開発に係る具体的な検討

学校卒業後の学びの継続性を確保するため、大学が有する教育資源を効果的に活用することが求められている。そのため、本コンソーシアム会議では、学校教育法第 105 条に基づいた履修証明書の発行の可能性も含めて、大学等が連携した新たな学習プログラムの開発に係る具体的な検討を実施した。

１　履修証明書発行の可能性についての具体的な検討

○第１回コンソーシアム会議における議論

・大学側には運営面、受講者側には費用的な負担が発生する影響にも鑑み、慎重な協議が必要

・一つの大学での実施は困難な状況にあるため、複数の大学が協力して、現在実施する公開講座やオープンカレッジを土台とした取組の可能性を今後も模索

※履修証明書の発行も含めて、大学のもつ教育資源を活用した取組の在り方については、今後も継続協議することを確認。

○第２回コンソーシアム会議における議論

・第１回コンソーシアム会議の内容を受けて、北海道医療大学が特別支援学校や企業等を対象に実施したニーズ調査の内容も踏まえて、多様な主体が連携した取組の可能性について協議。

２　「卒後のキャリア支援と生涯学習アクセシビリティ向上」に向けた協議

○日　時　令和４年 12 月 20 日（火）９:30～10:30

○方　式　遠隔会議システム ZOOM による協議

○参　加　北海道医療大学、北海道札幌あいの里高等支援学校、北海道真駒内養護学校、保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課、学校教育局特別支援課、生涯学習推進局社会教育課

○内　容　障害者の卒業後の学びを充実させるためには、特別支援学校等の在学中から学びの場に参画することが望ましい。また、労働・福祉分野との連携・協働した取組が一層必要となることから、切れ目のない支援体制の整備と生涯学習へのアクセシビリティ向上を目標とする今後の事業展開の可能性について、関係者が現状および課題を共有した。

３　先進地への視察

○宮崎県への視察（10 月 25 日（火）～10 月 26 日（水））

・多様な主体が参画する宮崎県のコンソーシアムの取組を視察することで、大学も含めた複数の教育機関等が連携した学びのあり方について理解を深めた。

○和歌山県への視察（12 月６日（火）～12 月８日（木））

・社会福祉法人一麦会や関係機関の取組を視察することで、障害者支援や学びのあり方について学び、ゆめ・やりたいこと実現センターの視察では、当事者と共に学びを引き出す居場所づくりについて理解を深めた。

「障害者の生涯学習推進コンソーシアム形成事業」に係る
北海道医療大学と関係特別支援学校とのオンライン協議
次　　第

1　概要

・日　時

令和４年12月20日（火）９時30分～10時30分

・会　場

Zoomによるオンライン方式

・出席者

北海道真駒内養護学校
北海道札幌あいの里高等支援学校
北海道医療大学　看護福祉学部
保健福祉部福祉局　障がい者保健福祉課
学校教育局　特別支援教育課
生涯学習推進局　社会教育課

・内　容

ア、「卒後のキャリア支援と生涯学習アクセシビリティ向上のための地域連携コンソーシアム形成事業」について
イ、特別支援学校の現状やニーズについての聞き取り
ウ、本事業の来年度の実施についての意見交流
エ、その他

2　協議の流れ

・開会

ア、主催者挨拶
イ、協議の趣旨説明
ウ、自己紹介（近況や専門分野等の紹介）

・協議

ア、北海道医療大学（宮本准教授）からの説明
イ、特別支援学校の現状やニーズについて（出席者からの聞き取り等）
ウ、意見交流（各出席者からの御意見等）

・閉会

ア、業務連絡（コンファレンスおよび第３回コンソーシアムについて等）

2022/8/23　北海道医療大学　令和4年度企画

令和4年度　卒後のキャリア支援と生涯学習アクセシビリティ向上のための地域コンソーシアム形成事業

【目的】
北海道における教育・医療・福祉・労働各分野の取り組みの連動を目指し、卒業後（高等支援学校、高等特別支援学校を想定）の進学や就職の選択肢を増やし、切れ目ない支援体制の整備と生涯学習へのアクセシビリティ向上を目標とする研修及び協議の場を展開する。

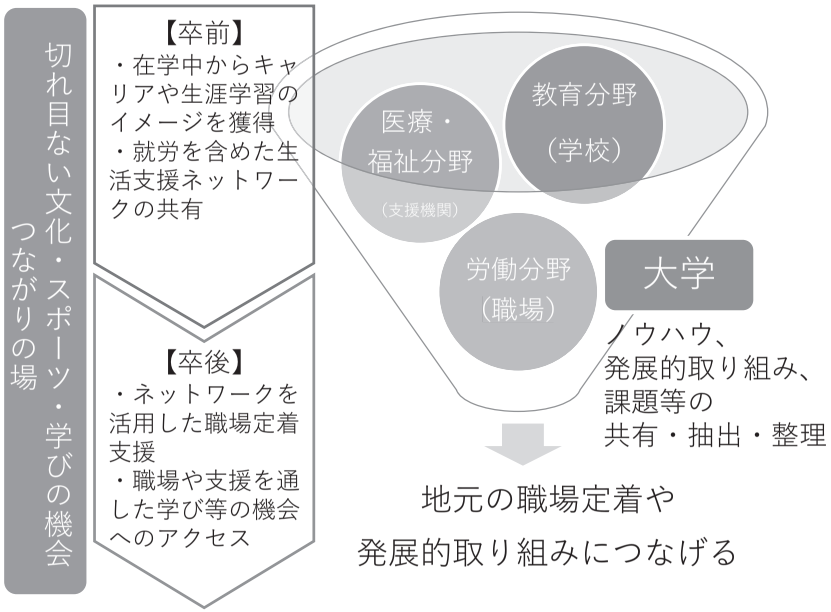
事業概要

就労支援分野と連携した卒後の支援体制構築を目指した事業を展開する。生活基盤の維持に留まらず、文化やスポーツなどに触れられるような、地域における豊かなつながりを持てる支援体制整備に向けて、様々な取り組みを浸透させる媒介を本コンソーシアムが担うことを目標とする。それらを通して、就職先となる企業との連携を強化し、マッチングの向上も視野に入れる。

様々な分野の団体が協働するための協議の場や研修を実施するとともに、様々なキャリアイメージやつながりの場を獲得するための生徒向けの研修を実施する。

背景

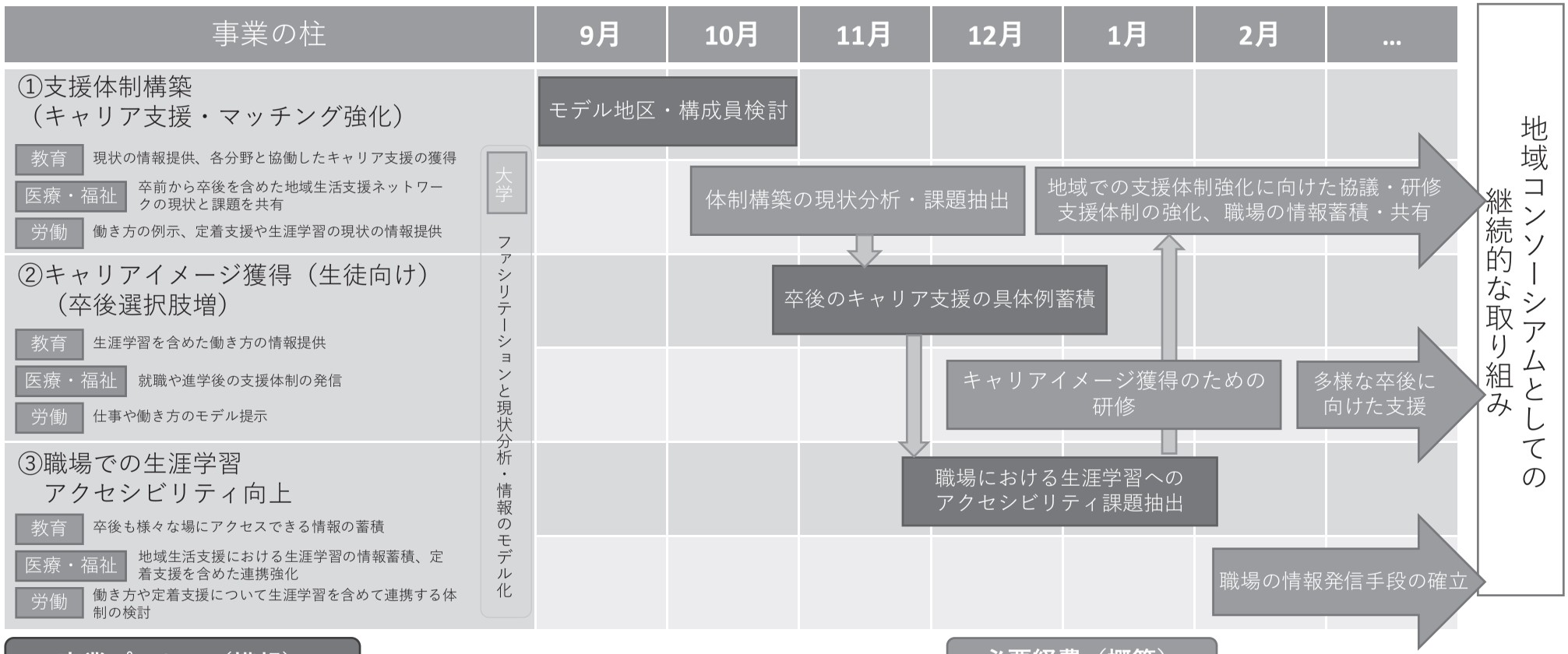
【令和2年度の成果概要】
成果：新たな連携やつながりを築くことができた。
課題：様々な取り組みの実態やその成果を発信することが必要。
【北海道医療大学　令和3年度成果】
課題：情報提供の場や活動資源の不足・地域差、学びの連続性のあり方、学校在籍時からの関心の醸成。
生涯学習に対して、就労との連動、金銭管理、人間関係、健康管理、仲間とつながる場などの役割を求めている。
学校に様々な学習機会の情報が集まる状況にない。
【全国的な課題】
職場定着（就労を継続できる地域の仕組みづくり）、就職率や進学率（多様なキャリア形成）



2022年度　地域コンソーシアム形成事業
各分野の役割イメージ（括弧内は副次的意図）

【教育分野】
職場とのマッチングや就職に向けた支援の現状や課題、発展的取り組みを共有する。
（職場や生活支援の分野の事業体とのつながりを開いていく。）
【福祉分野】
地域生活において学びの場につながる生活支援の現状や課題、発展的取り組みを共有する。
（職場や余暇の支援を切れ目なく整備できる体制を目指してつながりを開いていく。）
【労働分野】
就労が定着している地元企業・事業所のノウハウを共有する。
（教育や福祉との連動ができるようつながりを開いていく。）
【大学】
様々な取り組みの発信を媒介し、それぞれの分野間の協議を促進する。
（体制整備に必要なノウハウを蓄積、モデル化し、人材育成の根拠につなげる。発展的取り組みの創発支援。）
【生徒に対して】
キャリアイメージの獲得、卒業後の選択肢の増加、つながり続けられる場の獲得を目指す。

地域コンソーシアム形成事業　プロセス構想



事業プロセス（構想）

【構成員】：モデルとする地区（自治体）の教育・医療・福祉・労働各分野から抽出する。

①支援体制構築

　就職や進学の実績、就職後の定着支援体制の現状を踏まえ、マッチングを含めたモデル地区における支援体制強化に向けた情報共有や体制のあり方を検討する。

②キャリアイメージ獲得（内容は地域コンソーシアム構成員で検討）

　構成員の教育機関において、多様なキャリアと生涯学習モデルを学習できる研修を実施する。モデル地区において、卒後のキャリア支援の具体例を現状から紹介する。モデル地区において働きながら様々な活動に触れられる機会があるとなお良い。

③職場での生涯学習アクセシビリティ向上

　モデル地区での就職実績や生涯学習プログラムへのアクセシビリティの現状を踏まえ、課題を抽出する。それらを基に、働きながら多様な機会に触れられる情報発信手段や生涯学習プログラムのあり方を検討する。

必要経費（概算）

費目	金額	摘要
会議費		
会場費	24,000	6,000×4回 ※医療大利用の場合は無料
その他	10,000	資料代等　2,500×4回
研修運営費		
講師謝金	20,000	10,000×2回
その他	10,000	資料代等
計	64,000	

宮崎県への先進地視察

１　視察概要

（１）日時

令和４年 10 月 25 日（火）～26 日（水）

（２）視察先及び視察テーマ

①宮崎県教育庁生涯学習課

・都道府県レベルのコンソーシアムを形成し、行政と民間の連携による広域的な事業体制を構築する取組および工夫について

・テレビや新聞、その他のメディアを活用した一元的な情報提供体制の構築や事業成果の普及に向けた具体的な取組について

②ＮＰＯ法人障害者自立応援センター　ＹＡＨ！ＤＯみやざき

・当センターで継続する活動の概要について

・当事者のニーズや願いに即した障害者の生涯学習推進の在り方について

③南九州大学・野村宗嗣研究室

・障害者やその家族を対象とした、公開講座等の大学の取組について

④霧島おむすび自然学校

・知的障害や発達障害のある人たちの野外体験活動を通した学びの支援について

２　視察報告

①宮崎県教育庁生涯学習課

地区（中部、南部、北部）に分けた取り組みについて具体的に知ることができ、身近な地域における実践の参考となった。情報を一元化した情報提供やメディアの活用など、システムの構築や発信に向けた参考となり、その重要性も再認識された。

②ＮＰＯ法人障害者自立応援センター　ＹＡＨ！ＤＯみやざき

車いすユーザーの視点から、学生との交流の場など、出会いの場・第 3 の居場所として生涯学習に対するニーズがあった。また、当事者が企画から参加できる機会の重要性（主体的活動の楽しさ）、気軽に行ける実施場所の工夫などの必要性も語られた。

③南九州大学・野村宗嗣研究室

インクルーシブな公開講座は活動の目的や対象像が整理されていた。学生もサポートについて学べる場にもつながっており、大学の環境づくりの重要性も示唆された。また、学校卒業後に仲間が集まれる憩いの場の役割も果たしていた。

④霧島おむすび自然学校

野外活動の効果について知ることができた。事例から多様な体験の場として、自己理解を促進し、成長が実感できる場としての成果が分かった。一方で、サポート人材や財源などの課題、障害に合わせた工夫のあり方も重要である。また、フットパスなど地域をフィールドにすることで、地域の方との出会いや障害理解につながる取り組みも知ることができた。

和歌山県への先進地視察

１　視察概要

（１）日時

令和４年 12 月６日（火）～８日（木）

（２）視察先及び視察テーマ

①社会福祉法人つわぶき会 T-JOB

・自律訓練や就労移行支援の事業所での取組と障害者の生涯学習の関わりについて

②キセキの杜（就労移行支援事業所）

・当該事業所の取組や他機関との連携、障害者の生涯学習との関わりについて

③社会福祉法人一麦会（麦の郷）就労継続支援Ｂ型　Po-zkk（ポズック）

・当該事業所での障害者の就労継続支援の取組について

④社会福祉法人一麦会（麦の郷）ゆめ・やりたいこと実現センター

・「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」や「夕刻のたまり場」の取組について

⑤紀の川市教育委員会及び打田生涯学習センター

・ゆめ・やりたいこと実現センターと取り組む障害者の生涯学習に係る活動について

２　視察報告

①社会福祉法人つわぶき会 T-JOB

自立や就労移行のために、所属感を養うことや自己肯定感を高めることと、それにつながるような余暇活動や生涯学習の場の重要性について認識できた。

②キセキの杜（就労移行支援事業所）

当事業所とゆめ・やりたいこと実現センターの取組の関係性から、社会参加や就労移行と生涯学習の好循環事例を知ることができた。

③社会福祉法人一麦会（麦の郷）就労継続支援Ｂ型　Po-zkk（ポズック）

やらされる仕事ではなく、アート制作などの、表現を仕事とすることの重要性について学ぶことができた。

④ゆめ・やりたいこと実現センター

障害者が仕事帰りなどに利用する「夕刻のたまり場」の取組を通して、利用者の「こんなことをしたい」という願いや希望を引き出すこと、障害の有無に関わらず共に学びを作り上げること、ありのままでいられる場を作ることの重要性について理解を深めることができた。

⑤紀の川市教育委員会及び打田生涯学習センター

市町村がゆめ・やりたいこと実現センターなどの団体と協力して障害者の生涯学習を推進する取組について学んだ。また、公民館とゆめ・やりたいこと実現センターが連携し、障害者を対象とした公民館講座を開設しており、地域の人々の学び集う場や、地域課題の改善等に向けた機能を果たす場としての取組についても学ぶことができた。

※上記に加えて、「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」の視察も行い、北海道の取組拡充に向けて多くの情報を得ることができた。

取組４

特別支援学校等における障害のある児童生徒を対象とした生涯学習への意欲向上に資する取組の実施

障害者の生涯学習に対する意欲向上については、学校在学中から学びの場に参加することが望ましいが、地域における学びの場の整備状況は十分とは言えず、特別支援学校も含めた関係者が改善に向けた方策を検討することが必要である。
今年度は専門的な知見を有する大学へのヒアリングに取り組み、先進事例の把握と課題の整理に努めるとともに、大学が核となる講座の開設にも取り組んだ。

１　道内の大学へのヒアリング調査

○北海道医療大学（対応：志水幸教授ほか）
- ・コロナ禍前には、学生活動の一つとして、知的障害者を対象としたオープンカレッジを実施。地域住民が講師になることも。新規参加の少なさが課題。
- ・卒業後の学びの機会を保障するためには、企業等や福祉分野、特別支援学校との連携や理解促進が鍵となり、研修や協議の場の充実が必要と認識。

○北海道教育大学（対応：安井友康教授）
- ・余暇活動の充実の必要性を認識しており、小・中学生を対象とした遊び場を継続実施。卒業後の障害者を対象とする講座は、周知に課題。
- ・地域の教育資源や地域人材を用いて、当事者が意欲を持って楽しみながら参加できる講座設定が必要。

○北海道大学（対応：宮崎隆志教授）
- ・社会教育が重視してきた“地域づくり”という視点を重視することが重要。
- ・当事者ニーズを捉えた、“学びと活動の循環”を意識した講座の開設も必要。
- ・市町村で事業を実施する際には、誰も取り残さない社会の実現に向けて、“障害者とともに学ぶ講座”の実施を期待。

２　大学や特別支援学校等が連携した学びの機会の拡充

○北海道教育大学札幌校「みんなの遊び場」
- ・特別支援学校の児童・生徒、きょうだいを対象に、エアポリン等の遊具を用いた自由遊びや、リトミック運動の要素を用いたリズム運動の機会を提供。
- ・特別支援教育を専攻する大学生とのふれ合いは、参加者及び保護者からも好評。

○とうべつチャレンジドクラブ「インクルーム・ボッチャ」
- ・北海道医療大学地域連携推進センターや当別町スポーツ推進委員協議会と共催で行ったボッチャの体験を通したインクルーシブな交流機会の開設。

○北海道医療大学「オープンカレッジ in 北海道医療大学」
- ・知的障害の方を対象に、講座「パラスポーツ概論」と実技「ピンポン玉を用いたレクリエーション」を実施。大学生が運営や学習サポーターとして活動。

３　文科省作成リーフレットを活用した好事例の収集

○北広島市委託事業において先進地（東京都）を視察し、コンソーシアム会議やコンファレンスで報告

参加無料

2022

みんなの遊び場

in 北海道教育大学

第1回　11月　8日（火）
第2回　11月22日（火）
第3回　12月　6日（火）
第4回　12月20日（火）
第5回　　1月17日（火）

≫時間
16時40分～17時40分
（途中休憩あり）

≫場所
北海道教育大学札幌校

≫定員
6名（予定・先着順）

障害のある子どもだけでなく、
きょうだいの参加もOK！

北海道教育大学では、授業の一環として
子どもたちと実際に関わる実践を多く取り入れています。
この「みんなの遊び場」では、特別支援教育を学んでいる学生たちが、
主に身体障害をもつ子どもたちを対象に遊びの機会を提供することで、
子どもたちの楽しみと学生の学びの融合を目指しています。

おもしろい空間

たのしいあそび

申し込み・お問い合わせ：asobiba.sapporo@gmail.com

件名に、「みんなの遊び場　第〇回参加希望」とご記入ください。
折り返し、こちらから参加の可否や詳細のご連絡をします。

大学におけるパラスポーツに関する障がい者の生涯学習の提供と地域づくり

北海道医療大学（講師：近藤尚也）

目的　身近な地域でパラスポーツの定期的な活動の場（生涯学習機会）を提供
生涯学習の機会を通してインクルーシブな地域づくりにつなげる

当別町内関係機関と連携したインクルーシブなパラスポーツ活動の取り組みの実践（導入）

「インクルーム・ボッチャ」

1.目　的　障がいのある人もない人も、高齢者も子どもも、誰でも気軽に立ち寄って集まれる場、からだを動かせる場とし、また、そのような場を定期的にみんなで作り、活動していく（みんなで作る生涯学習の場）

2.主　催　とうべつチャレンジドクラブ

3.共　催　北海道医療大学地域連携推進センター、当別町スポーツ推進委員協議会

4.協　力　石狩支庁地区身体障害者福祉協会当別町分会、NPO 法人ふれ・スポ・とうべつ

6.会　場　当別町総合保健福祉センターゆとろ　多目的ホール

7.参加費　無料

8.参加者　22 名
（障がい当事者、障がい者スポーツクラブメンバー、スポーツ推進委員、大学生など）

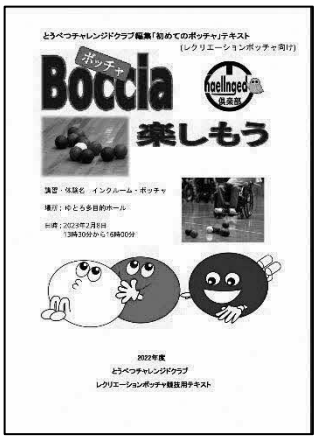
9.日　時　2023 年 2 月 8 日(水)13 時 30 分ら 16 時

１０.内　容　ボッチャ体験（団体戦：３人１チームをめやすに当日集まった人数でチームを決める）
※参加者は審判も体験。競技を通じて交流を深める

１１.ルール　ボッチャの公式協議ルールを少し変更して誰もが楽しめる「レクリエーションルール」（当別チャレンジクラブ作成）　開催当日にルール説明

１２.その他　屋内で履替えられる靴（雪で外靴が濡れている場合）・動きやすい服装。
新型コロナウィルス感染対策（マスク着用・消毒など）。体調がすぐれない場合は無理せず欠席すること。

１３.事務局　とうべつチャレンジドクラブ



今後も関係機関と協力し、参加対象も広げながら定期的に活動を継続していくことを目指す。

北海道医療大学「2022 年度 第 1 回オープンカレッジ in 北海道医療大学」

報告：北海道医療大学 講師 近藤尚也

目的：障がいの有無にかかわらず、生涯にわたって教育を受ける権利は基本的人権の一つとして保障されており、すべての人は教育を受けることによって発達や変化の可能性が生まれる。オープンカレッジと通じて、知的障がい等のある人の「もっと勉強したい！」「もっと新しいことをしたい！！」という気持ちをかなえる場を提供する。

主催：オープンカレッジ実行委員会（学生が主体、教員・大学がサポート）

日時：2023 年 2 月 4 日（土）15:45～17:45（15:30 集合）

場所：北海道医療大学札幌サテライトキャンパス

参加者：知的障害がある方（受講生）8 名　（案内は約 50 名に郵送した）

企画運営：学生 4 名（一部学習サポーター兼任）

学習サポーター：学生 7 名（兼任合わせ 10 名）

※学習サポーターは、受講生にマンツーマンで配置

内容：

・講義「パラスポーツ概論」（45 分）　講師　近藤尚也（北海道医療大学）
　パラスポーツの歴史や競技についての学習。学習サポーターと相談しながら学びを深めた。

・レクリエーション実技「ビアポンに挑戦！！」（45 分）
　ピンポン玉とコップを使ったアメリカ発祥のゲームを体験し交流した。

・閉会式では学習サポーターがメッセージを添えた達成表を受講生に渡した。

いくつしってる？みたことある？		
ボート	自転車競技(じてんしゃきょうぎ)	トライアスロン
テコンドー	シッティングバレーボール	陸上競技(りくじょうきょぎ)(マラソン)
バドミントン	馬術(ばじゅつ)	ボッチャ
車(くるま)いすフェンシング	5人制(にんせい)サッカー	車(くるま)いすラグビー
アーチェリー	パワーリフティング	ゴールボール
射撃(しゃげき)	車(くるま)いすテニス	水泳(すいえい)
卓球(たっきゅう)	車(くるま)いすバスケットボール	
柔道(じゅうどう)	カヌー	

参加者・家族から

・再開を待ちわびていた声も多く聞かれた。

終了時「楽しかった」「また参加した」と話していた。

コロナ禍の影響

約 3 年ぶりの開催となった。オープンカレッジを経験したことがあるものはいなかった。学生にとっては初めての取り組みとなるため、今回、規模を縮小し、教員サポートのもとでの実施となった。